

厚木南地区の原風景を想像して歩く

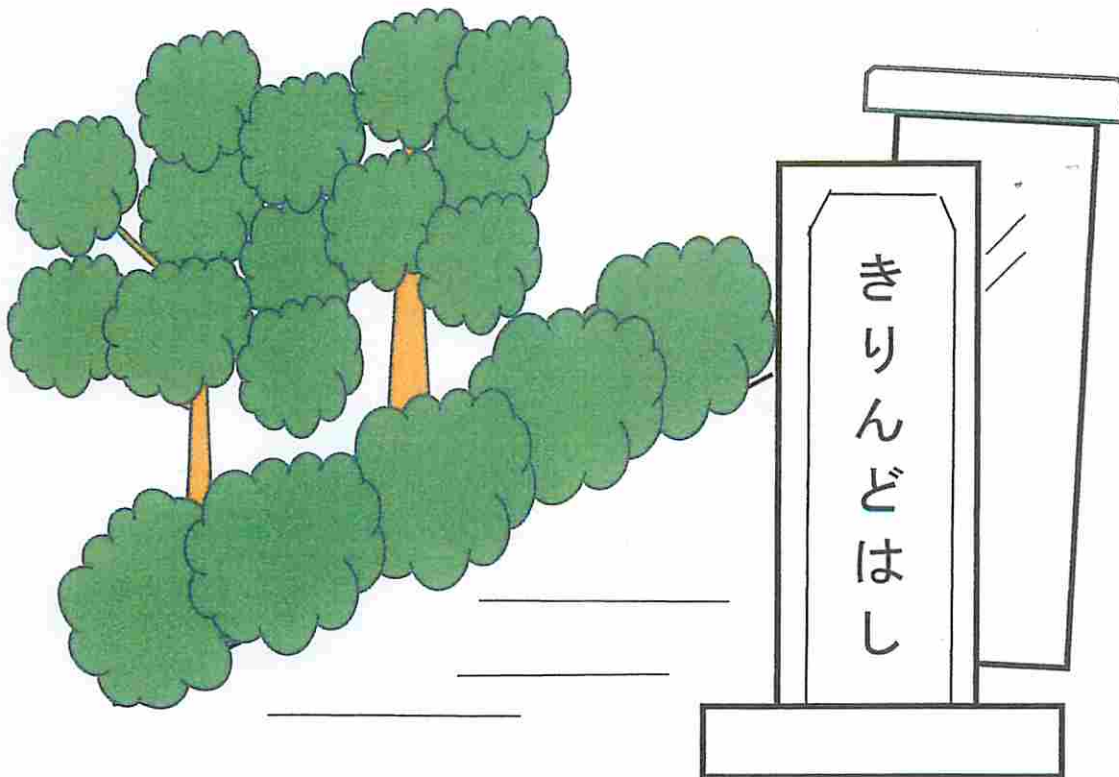
今回は渡辺崋山の旅行記「游相日記」に書かれている厚木南地区の大山街道沿いを、崋山が歩いた当時を想像しながら痕跡をめぐり歩きます。

実施日 令和7年3月9日(日) 集合:本厚木駅北口交番前 午前9時集合

行程 本厚木駅北口…万年屋跡地…大山街道…最勝寺…熊野神社…旧智音寺…

馬頭観世音…きりんど橋…岡田一本杉(御嶽社・馬頭観音)

…岡田一本杉バス停解散(12時頃) …徒歩



昭和30年頃のきりんど橋

1 渡辺崋山滞留の地 旅籠万年屋古郡平兵衛宅

所在地:厚木町三番地内、厚木神社から南方向へ約50m

相模への旅

三河国田原藩士(愛知県東部・渥美半島)で、画家・経世家である渡辺崋山は天保2年(1831)9月20日、江戸を出発し、相模国内の矢倉沢往還(大山街道)を通り鶴間・小園・厚木・藤沢を旅行した時に記した旅行記「游相日記」によれば、9月22日から24日まで厚木宿に滞在した。

この旅の主な目的は、11代藩主三宅康友の子友信の生母であるお銀さまの消息を尋ねるためであった。

崋山は綾瀬小園村で、お銀さまの嫁ぎ先清蔵宅を訪れ再会を果たした後、街道を西へ向かい海老名国分を経て河原口から相模川を船で渡り厚木宿へ着いた。

最初に知人である小林蓮堂の紹介状を持って上町西側の金物屋溝呂木宗兵衛宅を訪問したが、そっけない態度で対応されたため、そこを辞し天王町の旅籠万年屋平兵衛へ行き宿泊することにした。

崋山は亭主に、当地の書家、歌・俳諧などのしみ、一芸にひいでた人を集めてもらうようお願いし、亭主もこころよく引き受けた。

亭主の呼びかけにより万年屋へ集まったのは、斎藤鐘助(手習いの師匠で詩・書を好む)、唐沢蘭斎(医師、時勢に対する批判家)、内田屋佐吉(長唄)、目薬屋常蔵(三味線の名手)、蘭斎の娘で、これに亭主古郡平兵衛、小園の清蔵(お銀さまの夫)、弟子の高木悟庵も加わり、その夜は賑やかな酒宴が開かれた。

翌日、斎藤鐘助が選んだ「厚木六勝」の揮毫を依頼され、現地へ斎藤鐘助と唐沢蘭斎に案内され、街道を南へ下り厚木宿の南端にある「桐辺堤」に訪れて「厚木六勝図」絵を描いた。

厚木六勝(画題)

厚木六勝図

雨降山晴雪

雨降の晴雪

仮屋戸喚渡

仮屋の喚渡

相模川清流

相河の清流

菅廟祠驟雨

菅廟の驟雨

熊野森暁鴉

熊林の暁鴉

桐辺堤賞月

桐堤の賞月

○旧万年屋前県道歩道には、厚木市制30年を記念して「渡辺崋山滞留の地」の石碑が建っている。

大山、あふりの山ひだに降り積もった雪景

渡船場で渡し賃をとる仮屋(小屋)の風景

相模川の清流

桐辺の堤から北西の天神森の風景

熊野の森で朝夕、鴉ややかましく啼く風景

きりんど橋、桐辺堤の風景

2 大山街道青山通り(矢倉沢往還)

厚木宿の街道ルートは旧厚木村渡船場(東町八番5号付近)を起点に、現県道601号酒井金田線を東町～厚木町～幸町～旭町三丁目と南へ下り、旭町四丁目ソニー(株)正門前の三叉路を左折、本厚木駅南口発平塚行旧道バス路線(市道厚木戸田線)を南へ下り岡田四・五丁目を経て、リバーサイド団地南側を右折、酒井・愛甲から

伊勢原へ入り伊勢原大山に至る。

大山街道沿道の記念碑等

- ① 渡辺崋山来遊記念碑・厚木の渡し（東町八番5号付近）
- ② 烏山藩厚木役所跡（厚木町六番地内、厚木神社北側）
- ③ 渡辺崋山滞留の地（厚木町三番付近県道歩道上）
- ④ 馬頭観世音（旭町三丁目17番付近県道歩道上）
- ⑤ きりんど橋（旭町四丁目信号付近）
- ⑥ 旧平塚街道（旭町四丁目13番市道厚木戸田線際）
- ⑦ 郡境（旭町四丁目5番県道歩道上）

大山街道厚木宿の概観

上町（現東町）

上町の北端は厚木の渡し石碑建立地で、天王町との境界線は現あゆみ橋西入口信号付近である。

この延長約200mの区間は江戸期から商業地として栄え、沿道には商家が建ち並んでいた。

天王町（現東町・厚木町）

天王町と仲町の境界線は、現厚木市保健福祉センター（厚木小学校跡地）へ通じる道である。

この区間は延長約300mあり、厚木村の鎮守であった厚木神社があり、その北側には、江戸期には烏山藩厚木役所、明治以降、旧厚木町役場、厚木市役所が建っていた。

天王町には渡辺崋山が宿泊した「万年屋」と酒宴に同席した内田屋佐吉宅があった。

仲町（厚木町・幸町）

仲町は南へ下り現小田急小田原線の高架下を通過して、下町との境界線は現宝安寺に通じる道路付近である。

現小田急高架下附近には斎藤鐘助宅があった。

下町（現幸町・旭町三丁目・旭町四丁目）

下町に入ると現幸町で、さらに南へ下っていくと旭町三丁目を経て、旭町四丁目のソニー株式会社正門前コンビニエンスストア付近が下町の南端である。

下町には游相日記に書かれている「きりんど橋」、「桐辺堤」、「知音寺」や、旧街道の痕跡と思われる場所が数か所あり、游相日記に記されている内容をもとに、当時を想像しながら巡ると楽しい散策が体験できると思います。

3 最勝寺

所在地 旭町バス停付近（厚木市旭町3-5）

現在の旭町三丁目信号の南約100m南に「金光山最勝寺」がある。

創建不詳であるが、沿革を読むと「諸国に金光明院を建立せられ諸寺の僧侶を集

め金光明最新王經を講読せしにはじまるという。」と書かれていて、当寺の建立は、741年（天平13年）に聖武天皇が仏教による国家鎮護のため、当時の日本の各国に国分寺（こくぶんじ）の建立を命じた頃と思われるが定かではない。

また、「永禄三年（1560年）上杉謙信の越後軍が当地を通過の際、当寺も乱妨（らんぼう）に会いし事あり」と書かれている記録もあり、由緒ある寺院である。

游相日記では最勝寺の記述はないが、明治初期の厚木村絵図を見ると、現旭町三丁目信号南の西側沿道には、最初に「熊野堂」があり、その南側に「最勝寺」、「熊野森」、「熊野神社」を確認できる。

峯山も万年屋を出発して、最勝寺を過ぎると道沿いに建ち並んでいた建物は、まばらとなり、街道の西側には熊野森に囲まれた寺社が建ち、熊野神社付近まで来ると街道東側は「小字熊野前」といい、畑や雑木林が広がっている様子が伺える。

また、厚木の商人に掲載されている『明治10年地租改正に依る厚木町地目調査図の内』を見ると厚木宿の上町・天王町・仲町の街道中央部を流れていた用水路「前堀」は最勝寺南側で街道から西側へ直角に流れを換え、最勝寺西側を通る「諏訪海道」との間を並行して南へ流れ、きりんど橋付近で厚木用水と合流していたと思われる。

4 熊野神社

所在地：最勝寺から南へ約150m

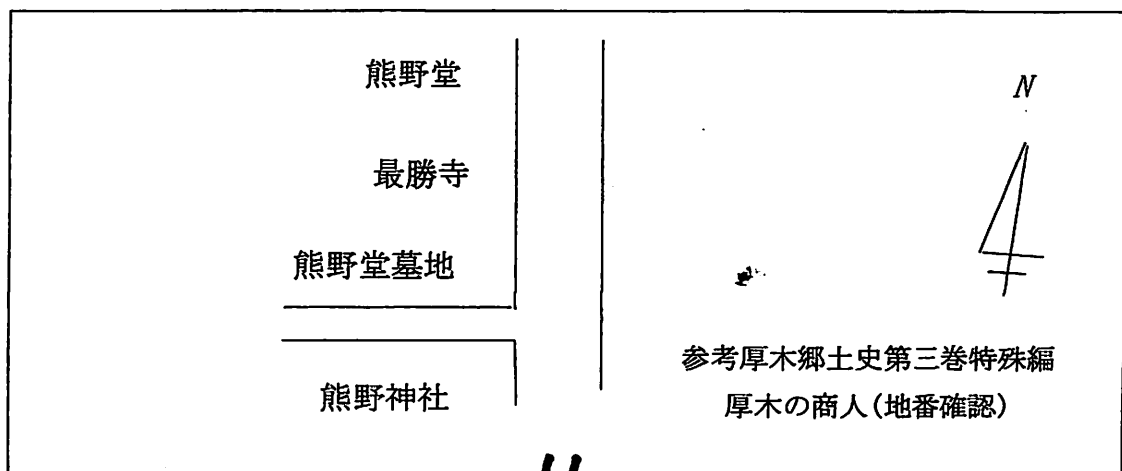
熊野神社由来(厚木市教育委員会)

熊野神社は古くは厚木村の総鎮守であり、別当寺が熊野堂(熊野寺)で、明治初期廃寺となった。明治六年(1873)厚木神社に合祀されたが明治中期現在地にもどった。

熊野堂の開基確認することができるものとして神社北側に鎌倉時代から続く代々の僧の墓碑等がある

社殿の後ろにそびえている。イチョウの木(樹齢約五百年)。は神社の神木で厚木市指定天然記念物(昭和五十二年四月十三日指定)となっている。木は一本のだけではなく数本あったらしいが大正七年頃一本を残して全て切り倒された。

熊野神社周辺の寺社位置図



次に、熊野堂は山号を「長授山厚樹院」、宗派「本山修験」京都市左京区の聖護院（しょうごいん）が本山で、江戸期厚木上・中・下各村の鎮守は船喜田明神・牛頭天王社・熊野三社で別当寺は船喜田明神が東光寺、牛頭天王社が知音寺、熊野三社が熊野堂で、明治初期、新政府の神仏分離令により三つの別当寺は廃寺になった。

熊野堂は現存せず住宅地となっているが、最勝寺南側の熊野堂墓地にある墓碑により歴史を知ることができる。

樹齢約五百年の古い神木イチョウ

現在も社殿の後ろにそびえている。地域では「イチョウの木に白蛇が住んでいて、むやみに木を傷つけてはいけない。」というようなことを聞かされた記憶がある。

厚木六勝の図「熊野暁鴉（ゆうりんぎょうあ）」歌碑

神社入口の左側に高瀬慎吾氏自作の「熊林暁鴉」の歌碑が建っている。

渡辺崋山が描いた「熊林の暁鴉」は、桐辺堤付近から朝夕に熊野森を遠望して、森の木々に群がるおびたしい宿鳥を描いたものである。

現在は森の木々は伐採されてなくなりイチョウの古木のみが高くそびえ立っている。

5 旧知音寺（游相日記では知音寺ときされている。）

所在地：熊野神社から南へ約 100m 下り、右折して西側約 200m

下宿バス停徒歩 2 分

由来・明治初期神仏分離令により廃寺。元は真言宗寺院で摂光山往生院と称する。天正年間（1573～1593）開山。廃寺後は「神式葬祭場」として改称し、墓地はそのまま檀徒の多くは神式葬祭となった。

游相日記から「やかて写し終わり知音寺という真言の梵刹（ぼんさつ）あり。大徳余か訪（は）ん事をさきに知りて茶菓を設ふけて待（ち）居り。そもそも此寺いつの頃よりか關きしはしらねとも、神祖の御ゆかりあれは一所も寺領賜りて、永祿のそれのとしの御印状あり。書画幅の什物にあるかきりは出し示すに、ひとつとして目に留まるへき筆墨（な）し。ただ後水尾院の宸翰と風外及高田敬甫の書画のみなり。」

解説 崋山は厚木六勝を写し終わり、知音寺の住職に招かれて立ち寄った。住職は茶菓子を用意して崋山の訪れるのを待っていたのである。当寺で所有する掛軸や什物（じゅうもつ）を見せてもらったが目に留まるものがなかったが。後水尾院（後水尾天皇）の宸翰（しんかん）と風外慧薫（ふうがいえくん）及び高田敬甫（たかだけいほ）の絵が目に留まったようだ。画家もある崋山は厚木村で書画について地元の人々と情報交換を行ったと思われる。

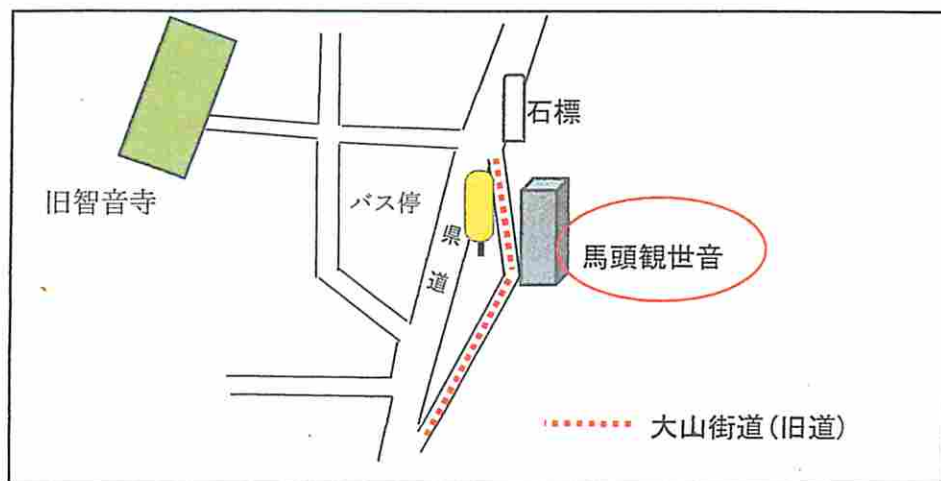
6 馬頭観世音

所在地 下宿バス停付近（厚木市旭町3-17-27）

県道歩道上に厚木市が設置した石標には次のとおり由来が刻まれている。

「平塚方面から来た荷馬車が暴れ出し馬主が死去した。これから馬を慰め馬主を弔うため明治41年9月、近郷、近在の馬主関係者により馬頭観世音の碑が建立される。」

付近の概略図



馬頭観世音は石標から道を左へ入り、約50mに建っている。（概略図参照）

この道は馬頭観世音からカーブして県道に再び合流する。

この延長約200mの道を大山街道の「旧道」と明記している地図もある。

海老名市発行の「迅速図より1882（明治15）年の海老名市域」を見ると、旧道の存在を確認できる。

この馬頭観世音が建っている前の道は、その後、交通事情の変化に伴い街道を直線化するバイパス工事が行われ本道を外れたと考えられる。

由来のとおり、この道が本道であった時代には、多くの荷馬車が頻繁に往来していたと思われるが、今は生活道路となり往時の面影はない。

7 きりんど橋

所在地 県道601号酒井金田線旭町4丁目信号付近

江戸末期厚木宿南端で、大山街道と西から東へ流れる厚木用水が交差する部分に架けられていた木橋。明治中期に石橋に架け替えられ、昭和30年代道路改修に伴い用水の暗渠化に伴い橋は消失した。

橋は消失したが、現県道を管理している神奈川県厚木土木事務所作成の管内図には「聖代橋(きりんどぼし)」と表記されている。

厚木市設置の石標には「きりんど橋」の由来が次のように刻まれている。

「170年程前、ここを訪れた六部(行脚僧)が浄財をもって石橋にし明治中期架けかけえる際「きりんど橋」と称した。古老の話によると聖代の御代には神獣きりんが出ると称して「きりんど橋」と呼ばれるようになった。」

由来の解説

聖代橋(せいだいばし/せいたいばし)は「きりんどばし」とも読むらしい、きりんど橋の由来は「神獣きりん」説と、江戸末期この付近に築堤された堤「桐辺堤」に桐の木が植えられたためという説があり、根拠としては後者の方が現実味を帯びているように思われる。

厚木用水は林地区で小鮎川から取水して、厚木市村内の灌漑・生活用水として利用されていた。

厚木用水はきりんど橋の下を通過後、現在のコンビニエンスストア裏からふじみ公園と並行して南へ流れ、平塚行岡田一本杉バス停付近で流路を東へ替えて、旧厚木市斎場跡地付近で相模川に排水されていた。

桐辺堤

天保二(1831)年9月22日、渡辺崋山が厚木宿に来て天王町の旅籠「万年屋」に宿泊。翌日の午後、前夜、酒宴を一緒に過ごした斎藤鐘助が万年屋を訪れ崋山に「崋山先生、私はかねがね厚木六勝を選び、来遊の名家の方から詩歌や俳句などを戴いています。先生の御来遊を記念してぜひ厚木六勝の図を揮毫願います」紙片に書いた厚木六勝「雨降山晴雪」、「仮屋戸喚渡」、「相模川清流」、「菅廟祠驟雨」、「熊野森曉鶉」、「桐辺堤賞月」を示し、この依頼を受けて崋山は絵を描くため唐沢蘭斎と斎藤鐘助に案内されて、厚木宿南端の桐辺堤に赴いた。

「桐辺堤」について游相日記から

「桐辺堤といふは長さ凡さ八、九町ありぬらん。文政築堤之時に出来しとそ。

竹草生出て新たに作りしとは見えす。堤をさかひ、右は井字渺然、左は白練一帯、ただ鳥の往きかふを見るのみ。」

解説 当時のこの堤の上から見渡せる風景は、堤の東側には相模川の河川敷が広がり、満々と水をたくわえた川が悠遊と流れ、西側は、霊峰大山と富士山の頂上を仰ぎ見ることができ、その前面一帯は水田が広がっていた。

この美しいパノラマのような風景ををえることができたのではないかと想像する。

「厚木六勝」について游相日記から

「これ月のよき所とて桐堤の賞月とはせしなり。此处より熊の森の全体を見る。宿鳥夥しければ熊林曉鶉とせしなるへし。雨降山も此地より手にとるはかり見わたされ、雪景いふはかりなしとそ。菅廟は青田中に造り出て江戸の見囲(みめぐり)に方弗たり。仮屋というは川原口村より厚木に至り。あはひの渡りにて、予かさきに渡りこせしところなり。相河清流というべきにもあらず」

厚木六勝の構図はこの桐辺堤の附近から厚木の町方、つまり北の方を眺めて描いたと言われている。

岡田一本杉(御嶽社・馬頭観音)

ふじみ公園の南端に「岡田一本杉」というバス停がある。

平塚行のバス停のかたわらに「水死供養塔」、「馬頭観音」が建っている。

水死供養塔は、厚木市史料によると「塔身右面□年四月月日、正面水死供養塔、左面施主当村桐部□」と刻まれている。

「施主当村桐部」については、桐辺堤と深く関わりがあることと、この付近では水害などによる水死者が出て、それを供養するために塔が建立されたと考えられる。

馬頭観音は、この付近で物資運搬用の馬がつながれていたことも想像される。

本厚木行バス停の傍らには御嶽神社の小堂がある。

御嶽神社は御嶽信仰が盛んだった頃、村に災いが入らないよう祀ったもので、一本杉の老木の根元に建立されたと伝えられているが、杉は昭和20年代前半に伐採されて、今はバス停の名称のみがその痕跡を残している。

主な参考文献

- 厚木と游相日記 高瀬慎吾著
○厚木の商人 鈴木 茂著 (株)神奈川情報社
○厚木街道いまむかし 大矢邦男著
○厚木郷土史第三巻特殊編 鈴木 茂編 発行厚木郷土研究会
○厚木市文化財調査報告書第拾集 厚木市域用水調査 発行厚木市教育委員会
○厚木市文化財調査報告書第拾貳集 「厚木の石造物(記念碑)」
発行厚木市教育委員会